

ヒマラヤ襞に魅せられて

(一社) ニューガラスフォーラム

伊勢田 徹

Caught by the beauty of Himalayan folds

Toru Iseda

New Glass Forum

「simple is best」という言葉がある。ニュートン力学や相対性理論のように自然界の現象は常に単純な原理に基き、また、素粒子理論が示すように物質の構成はシンプルである。そういう物理学を専攻したためか、それとも脳ミソの皺が少ないためか、物事を単純に考える性癖が私にはある。単純に考えてはいけないような人間関係にまでその考え方を持ち込んでしまったことも何度かあったが、40年以上携わった研究開発の仕事においてはプラスの面が多かったように思う。NEDOの資金を得て8年間開発を進めたガラスのインフライトメルティング技術のアイデアも、複雑なガラスの溶解現象を単純化して考えようとしたことが発端であった。

一方、「simple is best」は私の美意識の基本でもある。自然が産みだした砂のみ、あるいは雪のみの整った造形は実に美しいと感じる。写真でよく目にする光景だが、強い日差しに照らされた砂漠の起伏と風紋が描く陰影は素晴らしい。さらに、山好きの私にとっては雪をかぶったヒマラヤの高峰、それもヒマラヤ襞で飾り付けられた山々はたまらなく魅力である。

ヒマラヤ襞という言葉を目にしたのは20代の後半、同じ職場の同僚からの話が最初だった。ヒマラヤのトレッキング

に行こうと考える人はごく希だったその当時、同氏はヒマラヤに関する写真や地図や紀行文を精力的に収集していた。そこにはヒマラヤ襞をまとった鋭峰が沢山掲載され、それらの写真を一目見たとたん私はその虜になってしまった。ヒマラヤ襞のある山はなぜか特別の尊い存在に思えた。ただ、その当時お金も時間も体力もない自分にとって、それは自分の目で直接確かめる対象とはとても思えず、直接目にすることは到底叶わぬ夢のまた夢であった。ところが時代が変わってヒマラヤは開発が進み、お金と時間がある程度あれば誰でも行ける場所となり、いずれはヒマラヤ襞をこの目で見てみたいと私も思うようになった。

私が最初にネパールに足を踏み入れたのは



写真1 カレンヤムウ北壁のヒマラヤ襞

60歳の定年退職の10日後だった。待ちに待ってのヒマラヤというわけだ。行き先はチョモランマ（エベレスト）8,848mの近くの展望台カラパタール（標高5,545m）である。一行は男女16名。それに、日本からの添乗員2名、現地のサードー1名、シェルパ6名、コック1名、キッチンボーイ6名、ポーター3名、ヤク使い3名、それとヤク（正確にはゾッキョといって、ヤクと水牛の合の子の雄）21頭の大部隊である。平均年齢は63歳前後。カトマンズから小型飛行機で標高2,840mのルクラに飛び、そこから高度に慣れながら徒歩で10日間かけて登り詰め、帰路は同じ道を5日間で戻ってくる山旅だ。いわゆるエベレスト街道である。

最初に目にしたヒマラヤ巒はタムセルク6,618mの北西壁、次はアマダブラム6,814m。そして、圧巻はカンレヤムウからオンビガイチャン6,340mに至る北壁（写真1）である。どれも実に見事であり、飽きずにただ眺めた。幾筋もの縦縞と、その縦縞一本一本から派生する細かな無数の縞から構成される急峻な雪壁は神々しくさえ見えた。

何故このような紋様が形造られるのか正確なことはわかっていないが、急峻な地形、積雪、強風と気温変化が重要と考えられている。急斜面に雪が降り積もり、太陽光や暖かい気流が当たってそれが溶け、そして凍ることにより岩に強固に固定され、その上に雪が積もり、それが



写真2 ガンガブルナ7,454mの東壁

自重や強風で飛ばされ崩れ、積雪と崩落を繰り返して次第に深い巒を形成し、と、長い年月を経て造られるものと推測される。

二度目のネパールは、フムデからトロンパス5,416mを経てナヤプールまでアンナプルナ山系の周りを半周するルート230kmを歩いた。アンナプルナの隣にあるガンガブルナ7,454mの東壁（写真3）とその西にあるティリチョピーク7,135mの北東壁はヒマラヤ巒が見事であり、さらに西にあるダウラギリ8,167mの北東壁にもそれが認められた。

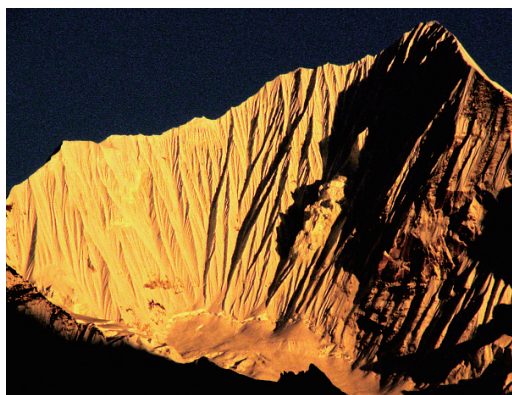


写真3 夕陽のガンチェンポ6,387m北西壁

三度目は、カトマンズの北に位置する「世界で最も美しい谷」と言われたランタン山域を歩いた。この山域ではガンチェンポ6,387mの北西壁がすっきりとしたヒマラヤ巒を見せ、特に夕陽に映えた光景は見事だった（写真3）。

ヒマラヤ山脈の東に位置する東チベットも美しいヒマラヤ巒を持った鋭鋒の宝庫である。しかし、政治情勢が不穏なチベットに外国人が自由に足を踏み入れることは難しく、我々が目にできるのはそのごく一部である。とりあえず雲南省北部の梅里雪山と四川省西部の亜丁（ヤーディン）自然保護区に足を運んだ。日中合同で行われた学術登山（1990年12月）で日本人17名を含む全員が雪崩で亡くなった梅里雪山の主峰カワカブ6,740mの南に、女神峰とも呼ばれるメツモ6,054m（写真4）が聳える。これらの山々の東壁にヒマラヤ巒が認められた。



写真4 メツモ 6,054 m 東壁のヒマラヤ襷

南米のペルーとボリビアのアンデス山脈もヒマラヤ襷の宝庫である。とりわけペルーのブランカ山群は秀峰が多く、アルパマヨ 5,947 m は「世界で最も美しい山」と称され西南壁は美しいヒマラヤ襷で知られる。その西南壁を見ようと、あるツアーに登録したが参加者が十分集まらずに成立せず、そのときは代わりにアフリカのケニア山レナナピーク 4,985 m とキリマンジャロ 5,895 m に登った。そして1年待ったが結局実現できず、止むなく南壁側を通るツアーで甘んじることとなった。一行は男女10名と添乗員1名、現地スタッフ10名、ロバ15頭、馬3頭、リヤマ3頭の大部隊である。高度順応を終え、ワリパンパからウニオン峠 4,760 m を経てサンタクルス谷のタウリパンパに下り、その西の高台から、めざすアルパマヨ南壁の全貌を捉えることができた(写真5)。チャ

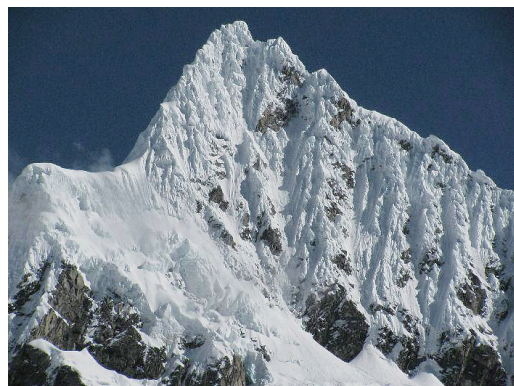


写真5 アルパマヨ 5,947 m 南壁のヒマラヤ襷

クララフ 6,112 m は天候に恵まれず眺めることはできなかったが、リンリヒルカ 5,810 m 南壁、ワンツァン 6,395 m 西壁などあまり知られていない山々でも見事なヒマラヤ襷を見ることができた。ヒマラヤほど強風が吹かないせいか襷は鋭角的ではなく、若干物足りない気はしたがヒマラヤとは違う雰囲気味が味わえ充実した旅であった。

ヒマラヤ襷は、東チベットを含むヒマラヤ山脈とアンデス山脈以外では見ることはできないが、ニュージーランドや日本でもヒマラヤ襷の紋様を見ることができる。写真6はニュージーランドのマウントクックの近くに聳えるMt. フットスツール 2,764 m 付近の南壁である。縦縞だけで細かな襷はない。北アルプスの鹿島槍ヶ岳 2,889 m の北壁(写真7)や剣岳にもヒマラヤ襷の紋様ができる。

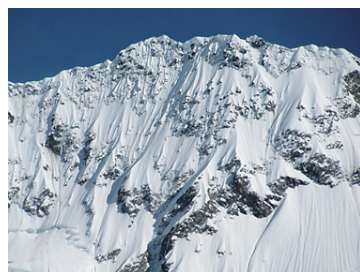


写真6 フットスツール 2,764 m 付近の縞模様



写真7 鹿島槍ヶ岳 2,889 m の縞模様

これまでヒマラヤ襷にこだわってあちこちの山を見てきたが、まだまだ見たい山は尽きない。姿形が整い、岩肌の露出がないシンプルで理想的なヒマラヤ襷をまとった山を求めて、あと数年は年1回程度の頻度で海外のあちこちを見て回りたいと思っている。